
金竜譚

innocent

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金竜譚

【Nコード】

N6433R

【作者名】

innocent

【あらすじ】

竜人の村アスカには願いを叶えるといわれる宝珠があるという。さまざまな連中から狙われる宝珠を守るため村の長老は宝珠を封印することに・・・

序章

ここは竜人族の村アスカ。この世界には人間のほかに竜人という種族がいて人間とは違う文化を持って暮らしていた。

アスカには古くから大切に守られてきた宝珠があった。それは黄金に輝き、金剛石の如く堅固だという。この宝珠の魔力に導かれ多くの争い事が起きた。

それもこれもこの宝珠にはある噂があった。

それはこの宝珠を使えば使用者の望みを一つ叶えてくれるというものだった。

事実かどうかは置いて、人はそれをこぞって欲しがった。人だけではないアスカにすんではないが同族であるはずの竜人からも狙われ始めた。

ことの危険性を悟った長老は宝珠を村から遠ざけ封印すると決めた。

発端

村は騒然としていた。竜人は人間には負けない。いくら人間が宝珠を狙って攻めて来ようが、アスカに住む竜人は宝珠を守り通す自信があった。しかし相手が竜人となれば話は別だ、相手が数で押して来ればそれに耐える程の持久力はなかった。

ことのきっかけは三日前に遡る。

ワイバーンに乗って竜人が攻めて来た。ワイバーンとは飛竜の一種で翼の生えた蜥蜴のようなモンスターだ。ワイバーンは竜人の基本的な移動手段である。

最初は誰もがその竜人たちを客人だと思った。今まで人間以外の種族が宝珠を狙って攻めてくることは無かったからだ。しかし彼らは突然攻撃を仕掛けてきた。目的は宝珠だともいつていた。

結局撃退はしたものの不意をつかれ多くの犠牲者がでてしまっていた。

そんなことがあり今アスカの村は混乱していた。

「やはり竜の谷に持つていくしかあるまい」

そう話すのはアスカの長老である。竜の谷は竜人にとっての聖地だ。そこに宝珠を封印すればどんなに強い竜人であろうとも宝珠を狙うことなどないだろうと考えたのだ。

「しかし、一体誰が…」

長老の言葉に反応したのは側近の男グラナである。

「グラナよ、わしはお前しかいないと思っっているんじやが」

グラナは村一番の豪傑だ。三日前の竜人襲来するときも彼がいなくて

は撃退することは出来なかったであろう。

「ですが、私がない間に村が襲われでもしたら……」グラナの言うことも正論だ撃退したとはいえ奴らが仲間を増やしてまたやって来る可能性だってあるからだ。

「……そうだ」

突然グラナが何かを思い出したようにきりだした。

「長老、彼はどうでしょう」

グラナは思い出した、自分の代わりに宝珠を運んでくれるであろう優れた竜人を。

選抜

「よしよし、いい子だ」

そういつてワイバーンの手当をしているのはアスカの戦士の一人イグルスだ。髪は黒く、その整った顔立ちは確実にイケメンの部類に入るだろう。サラサラと摩くその髪は程よい長さに切っており彼の爽やかさを一層感じさせる。

「…グルルウ」

「そんなに酷い傷じゃないから大丈夫さ」

竜人は自分のパートナーのワイバーンとだけ特別な絆で結ばれ会話することができる。

成人の儀の際に竜人は自分のパートナーとなるワイバーンを選ぶ体内に流れる魔力の流れを繋ぎ、誓いを交わす。それからは一生それ以外のワイバーンにのことは許されない。

「デイル、お前と出会ってもう5年になるのか」デイルとはイグルスのワイバーンの名である。本名はデイルティス、鱗は青鈍色で翼は綺麗な緑色の中型のワイバーンだ。尾の部分を怪我しており包帯がまかれている。

「悪いな、次はもつとちゃんと戦うから」

デイルティスの包帯を見ながらイグルスは呟いた。

そこへ

「いーぐーるーすっ」

と彼をよぶ声がした。振り返るとそこには金髪の少年がたっていた。

「なんか用か、エルト」

エルトと呼ばれた少年は笑いながら答えた。

「今日もイグルスに稽古つけてもらおうと思ってさ」

エルトはイグルスより歳が5つ下の18歳の少年だ。今年成人の儀をむかえるはずだったのだが宝珠の一件が落ち着くまで延期ということになっていた。

「俺なんかよりグラナさんにつけてもらったほうがいいんじゃないか、せつかくあんなすごい人が父親なんだし」

「…親父は俺に稽古つけてくれないんだよ」

とエルトは苦笑いをしながら言った。どうやらなにか事情があるらしい

「事情は知らないが、なら俺がつけてやる。さっさと準備しろよ」

「ああ、ありがとう」

とエルトが準備をし始めたとき…

「悪いがそれは無理だ」

突然声がした。

二人が振り向くとそこにはグラナと長老がいた。

「長老様にグラナさん…一体どうしたんですか」

とイグルスが問いかけた。

「イグルス、お前にやってもらいたいことがある」グラナはイグルスを見つめて言った。

「やってもらいたいこと…ですか」

「ああ、お前の实力を見込んでのことだよく聞け。」

一呼吸おいてグラナは真剣な顔つきで言った

「お前に宝珠を竜の谷まで運んでもらいたい」

願望

グラナとエルトは親子だが血は繋がっていない。

エルトは拾われた子だった。

雷が鳴り響き、強い雨が降り注いでいたある日の夜、村の入口に幼い赤子がいた。

当時、長老はまだ若かったグラナにこの子を育てるように言ったという。

「きつと、嫌々だったんだろうな」

エルトは風車小屋の屋根裏から月を見て言った。

ここはエルトの小さい頃からの秘密基地だ。一人になりたいときは大体ここにきて考えごとをしていた。

グラナは村最強の戦士だがエルトに剣や槍の稽古をつけてくれたことは一度もなかった。

「俺だつてもう18だ、戦ったつてべつにいいじゃないか」

三日前の戦いにエルトは参加させてもらえなかった、それはエルトが成人の儀を終えていないことが理由の一つなのだが、なにより全体指揮官であるグラナの命令でもあった。

「でも、やっぱり自分のワイバーンがいないと…」

成人の儀を終えていないエルトに戦闘時のパートナーとなるワイバーンはいない。竜人の戦いにワイバーンは不可欠であり、やはり成

人の儀を終えていないという者を戦いに参加させないというグラナの判断は正しかった。

「…イグルスしばらく会えなくなるな」

今日の昼、グラナがイグルスに頼んだ宝珠移動の役目をイグルスはすんなりと引き受けた。

昔からなにをやってもイグルスには敵わなかった。剣の腕も立ち、強い魔法が使えるイグルスはエルトの憧れだった。そんな彼としばらく会えなくなるというのは少し寂しく、でもそんな立派な任務を与えられた彼を羨ましくも思っていた。

「俺も行きたいな」

エルトの中でその想いは次第に強くなりはじめた。

兄妹

エルトが風車小屋で考え込んでいるとき同じくしてイグルスはグラナの家を訪れていた。

「こんばんは、グラナさん」

イグルスは辺りを気にしながら言った。

「おう、イグルスどうした」

「あのエルトは…どこに？」

「ここにはいねえよ、いつもの場所にいるんじゃないか？」

「風車小屋ですか…なら」

イグルスは何かを決めたように切り出した。

「グラナさん、例の任務に一人連れていきたい奴がいるんですが…」

グラナは眉間にシワを寄せイグルスを睨みつけていった

「…誰をだ？」

するとイグルスの背後から一人の少女が現れた。

「お久しぶりです、おじ様！」

その声にもないグラナの顔は緩んだ。

「なんだ、リトじゃないか」

すかさずイグルスは言った

「こいつと一緒に連れていきたいんです」
途端グラナの顔つきがまたかわった。

「…てめえの妹をか？ 理解に苦しむな」

「リトは補助魔法に長けています、こいつがいれば戦いもぐっと楽になります」

グラナはリトを見て言う。

「お前はいいのか、死ぬかも知れないんだぞ」

「はい、覚悟しています」

その目に迷いは無かった。

「…好きにしろ、宝珠を頼んだぞ」

イグルスとリトは軽く礼をして家に帰っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6433r/>

金竜譚

2011年10月8日21時05分発行